

巻頭言

グローバル人材育成教育学会 会長 勝又美智雄

学会発展の第2段階をたくましく、より楽しく多彩に

2013年秋に発足した本学会が今年6年目に入りました。昨年秋の名古屋・名城大学で開催された5周年記念の第6回全国大会は300人を超す参加者でにぎわい、内容的にもきわめて充実したものでした。それに合わせて5年間の活動の成果となる形で、学会編の『グローバル人材育成教育の挑戦』(IBCパブリッシング、440ページ、2800円)と題する「実践ハンドブック」を出版しました。これには全国の大学・高校の会員50人以上が執筆してくれ、全国の教育現場で「グローバル人材育成」に取り組む人たちの指針になるガイドブックとして注目されています。年に2回発行している学会紀要(本誌)も年々充実し、優れた論文が着実に増えています。学会の会員数も今春には400人に到達する見込みです。まず最初の5年間はきわめて順調な発展ぶりであり、本学会が社会のニーズ、教育界の期待に応えるものとして広く歓迎されてきたことを物語っていると思います。

本学会の創設者で初代会長として力強く牽引してきた小野博先生が昨秋の全国大会での総会で新しく理事長となり、私が会長職を務めることになりました。その最大の理由は、学会の規模が大きくなるにつれて役員の仕事が急増してきたことです。特に会長は全国各支部の大会に出席するのをはじめ学会の運営から対外的な業務が重なり、個人的な負担が相当大きくなっていました。そこで学会の組織体制をさらに整備・充実させるために、新たに理事長ポストを設け、会長と経営責任を分担するよう会則を改正した結果です。法人組織で言えば、理事長は最高経営責任者(CEO=Chief Executive Officer)であり、会長は最高業務責任者(COO=Chief Operating Officer)として、二人が事実上の二人三脚で学会の運営に当たって行こうと決めたわけです。

私自身は国際教養大学教授だった時に小野会長から学会設立の相談を受け、全面的に賛同して最初の4年間、副会長を務めました。新理事長とはお互いに気心もよくわかっており、学会をさらに発展させていく方針で完全に一致しています。付け加えれば、小野理事長は1945年生まれ、私は1947年生まれで、学会役員の中では二人だけが70代です。当然、二人とも「老害」をまき散らすことを厳に謹んで、学会の運営に若い人をどんどん登用し、出来るだけ早く60代以下の若い世代にバトンタッチしよう、そしてこの学会が常に若い世代のエネルギーを吸収し、元気に発散させる場としてさらに発展させる礎石になろう、と話し合っているところです。

どんな組織・団体も成功しているところはほぼ例外なく創業に10年かかっています。学会は今、創業期の半分が経過した段階です。本学会は既に教育連携部会、異文化対応部会などの部会を発足させて会員たちの日常的な教育・研究実践に役立つような活動を進めています。今後はさらに各種教育プログラムのあり方や小中連携、大学教育と卒業後のキャリア開発の接続など多様な課題について共同研究することを検討していきます。

学会内での共通理解になっていることは「グローバル人材」とは単に英語ができる人ではなく、日本の内外を問わず、世界のどこにいても、仕事を自分の「使命」と心得て挑戦し続け、日本人としての誇りを持ち、周囲の人たちから尊敬され、信頼される、人間的な魅力にあふれた人なのだ、ということです。そういう優れた人材＝人財を育てるために、まさに会員自身が「グローバル人材」たるべく努力しよう、と呼びかけます。同時に会員からの意欲的で建設的な提案を大いに期待しています。

(国際教養大学 名誉教授)